

西南学院大学博物館所蔵の キリシタン関係虚構系資料について

鬼束 芽依

1. はじめに

本稿で扱うキリシタン関係虚構系資料とは、1873（明治6）年にキリシタン禁制の高札が撤去されて以降の、キリシタン（南蛮）ブームのなかで創られた・誤認された・偽造された資料をいう。

虚構系資料の存在については、後述の松田毅一の研究（1969）を筆頭に、フーベルト・チースリク（1995）、高倉洋彰（2014）、中園成生（2011a・b、2018、2019a・b・c、2021、2024）、安高啓明（2022）、三輪地塩（2023）などによって研究がおこなわれてきた。なかでも虚構系資料とその問題について、具体例を挙げながら検証を続けているのが中園成生であり、虚構系資料という呼称についてもその著書『かくれキリシタンの起源』（中園 2018）第5章2項『「虚構のかくれキリシタン」の問題』を踏まえたものである。

虚構系資料は、中園によってその成立背景・出自・経済的側面などから分類がされている（中園 2024）。本稿ではまず、虚構系資料の成立過程について述べる。そして、資料の成立背景に基づき、西南学院大学博物館が所蔵しているキリシタン関係虚構系資料の分類をおこないたい。

2. 虚構系資料の成立過程

虚構系資料の成立には、近現代の人々が持っていたキリシタンに対するイメージや、非学術的な関心が非常に大きく関わっている。そしてそのほとんどが、学術的な検証ではなく、「近現代の人が聖書の記載やキリスト教のあり方などを参考にした主観的

な判断に拠って、キリシタン信仰や（禁教期を含む）かくれキリシタン信仰、禁教制度に関するものだと主張している資料」（中園 2024）である。以下、虚構系資料の成立過程を、歴史的背景とともに紹介する。

1) 明治時代 キリシタン遺物の展示

1906（明治39）年に東京帝室博物館の第5回特別展甲部「嘉永以前西洋輸入品及参考品」が開催された。本展は17のテーマで構成されており、そのうちの一つに「耶蘇教遺物」すなわちキリシタン関係資料が含まれていた。日本国内に現存するキリシタン関係資料がはじめて公の場に展示されたもので、注目を集めた。

本展に出品された「耶蘇教遺物」には、長崎奉行所の旧蔵品が多く含まれる。これらは、現在東京国立博物館が所蔵している「キリシタン関係遺品」である。具体的には、「マリア観音」と呼ばれる白磁観音像や、ロザリオ・十字架・メダイ・踏絵・聖画などが展示されていた。本展をきっかけとして、キリシタンやかくれキリシタンに多くの関心が集まった。また、踏絵をはじめとした偽造品もつくられるようになった（安高 2022：305～306頁）。

このころは、主にお雇い外国人として日本に駐在していた外国人向けの土産物としての側面が強かったと考えられる。大正時代末頃には、「史料研究会」によって12枚組の「長崎史料絵葉書」が発行された。そこには現在東京国立博物館が所蔵する踏絵を掲載した絵葉書も含まれている（図1）。偽造品の制作者は、実際の遺物だけではなく、このような絵葉書も参考資料としていた可能性がある。



図1 「長崎史料絵葉書」より「絵板」(踏絵)の絵葉書

2) 大正時代～昭和時代初期

(1) 南蛮趣味の流行

明治時代末から大正時代にかけて、文壇では南蛮趣味が流行し、キリシタンという存在が文学によっても広まった。代表的な作品として、与謝野鉄幹・平野萬里・北原白秋・吉井勇・木下杢太郎による『五足の靴』(1907〔明治40〕年)が挙げられる。本書は、5名の作家が九州西岸を巡った紀行文・エッセイである。木下杢太郎が旅行に先立って上野の図書館でキリシタンの文献を読みふけり、木下が旅行を牽引したことで、主にキリシタンの遺跡探訪をおこなう旅になったという(中園 2018: 409頁)。北原白秋は旅行の後に『邪宗門』(1909)で多くの異国情緒的な詩を発表した。また、芥川龍之介による「切支丹物」小説群(1916〔大正5〕～1923〔大正12〕年)なども、南蛮趣味やキリシタンブームを後押しした作品として挙げられる(三輪 2024: 50頁)。

(2) 新たなキリシタン遺物の発見

1919(大正8)年2月17日、大阪府茨木市千提寺の東藤次郎家所有のクルス山から、「慶長八年正月十日」銘のある「上野マリヤ」墓碑が発見され、この地域一帯がキリシタンに関係することが判明した。翌年の9月26日、東家の「あけずの櫃」とよばれる箱が開封され、中から「聖フランシスコ・ザビエル像」(現在、神戸市立博物館蔵)をはじめとして数多くのキリシタン遺物が発見された。

東家に続いて、千提寺の中谷家と下音羽の大神家

からは1922(大正11)年以降、原田家などからは1930(昭和5)年以降、貴重なキリシタン遺物が次々と発見された。この新たなかくれキリシタン遺物の発見については繰り返し新聞報道がおこなわれ、日本中が注目した。こうして、「かくれキリシタン」の存在は研究者や教会関係者のみならず、多方面からの注目を集めることとなった。そして一種のキリシタン(南蛮)ブームともいえる状況となり、蒐集家などによって「南蛮物」や「キリシタン遺物」が売買・蒐集されるようになる。

この頃には、千提寺・下音羽地区に骨董屋などの出入りが多くなったことが知られている(茨木市立文化財資料館編 2024)。明治時代には主に外国人向けに「キリシタン遺物」が制作されていたが、茨木キリシタン遺物の発見以降は、国内で販売するために「キリシタン遺物」が制作されていたことが考えられる。こうして、「かくれキリシタン遺物」が全国各地で「発見」されるようになった。

(3) 「キリシタン灯籠」の発見

茨木での発見と同時期に「発見」された代表的な虚構系資料が、「キリシタン灯籠」である。「キリシタン灯籠」は、織部灯籠が「キリシタン遺物」とであると誤認されたものである。「キリシタン灯籠」発見の経緯は次のとおりである。

1922(大正11)年に、ある郷土史家が静岡市内の寺院の「茶室の裏に妙な形の灯籠がある」ことを聞き、寺院を訪れた。そこで、笠の部分に人物が浮き彫りにされた織部灯籠を発見した。その人物が「静岡市横内来迎院の南蛮屏風に描かれている耶蘇の宣教師に似ている」ため、パリ外国宣教会に属するカトリックの神父も確認したところ、「たしかにローマのカトリックの聖人像で服装はたしかに古代ローマの法服である」と断定された(松田 1969: 174～175頁、中園 2018: 418～419頁)。

こうして、同様の織部灯籠(図2)は1920年代頃から全国各地で次々と発見され、以下に代表されるような、竿の形態的特徴をもってキリシタン遺物であるとみなされてきた。

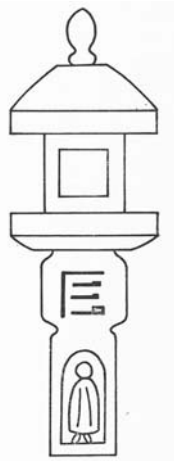


図2 織部灯籠の基本的形態 (松田 1969: 図版5)

第1に、植込式四角柱上部で左右に少し張り出した竿の形状が、従木の長いラテン式十字架、またはT字形のエジプト十字架を模している。

第2に、竿の十字交叉点の中央部の陰刻の異形の文字記号を、複雑に変装を凝した欧文文字の組合せの変形文字とみ、それをキリスト教関係の記号 (IHS、FILIIUS、PATOLI など) とみてる。

第3に、竿下方角柱正面の翁状の光背を堀り窪めた中に、陽刻レリーフの人物像がある。それはイエス、パテレン (宣教師)、マリアの各像で、隠れキリシタンが礼拝対象としたものである。

(松本 2000: 50頁)

織部灯籠「キリシタン灯籠」説はその後、石造美術の専門誌『史迹と美術』などにおいて賛否両論の議論がなされた。しかし1930 (昭和5) 年、美術史家の西村貞が雑誌『週刊朝日』に「キリシタン灯籠」を寄稿したことを契機として、「キリシタン灯籠」説に基づく主張が活発となった。西村にヨーロッパ留学の経験があることが肯定要素に繋がったようである。

ただしその後、坂重吉「所謂切支丹潜伏墓標及び切支丹燈籠に就いて」¹⁾によって、「十字形はキリスト教に限られた図像ではないこと、文字記号は欧文文字ではなく古体漢字であること、人物像は仏像であること」などから「キリシタン灯籠」説は明晰な否定がなされた (松本 2000: 51頁)。だが、キリシ

タン灯籠は現代においても一部の間で根強く支持されている。この点については次項でも述べたい。

(4) キリシタン研究の開始

一方で、学術的なキリシタン研究が開始されたのも大正時代である。茨木でのキリシタン遺物発見後、東京帝国大学の新村出、濱田耕作、梅原末治らによってそれらが報告された²⁾。また、東京帝国大学宗教学講座教授の姉崎正治によって『切支丹宗門の迫害と潜伏』(1925)、『切支丹禁制の終末』(1926)、『切支丹迫害史中の人物事績』(1930)、『切支丹伝道の興廃』(1930)、『切支丹宗教文学』(1932) が出版され、のちに「キリシタン五部作」とよばれた。これらの研究活動を嚆矢として、本格的なキリシタン研究が着手されていった (三輪 2024: 50頁)。

3) 昭和時代～現代

排耶運動 (キリスト教排斥運動) は明治時代にもおこなわれていたが、特にアジア・太平洋戦争中はキリスト教徒に対する差別や偏見が一層大きくなり、キリスト教撲滅演説会などもおこなわれていた³⁾。そのような中、キリスト教を表立って信仰することは憚られた。また、自らも差別の対象となることを恐れ、キリスト教徒に対する差別を傍観するしかない状況にあった人々が多くいたことも想像できる。戦後には、それまでの皇国史観からの脱却に伴い、日本各地で多様な地域史・郷土史の詮索と見直しが盛んとなった。そして、「ある種の実感的思い入れとともに」郷土史家による地域のかくれキリシタン新資料探索も進められた。そこには、人々のかくれキリシタンに対する好奇心だけではなく、迫害されていたことに対する同情心や後悔などの思いもあったと考えられる。その結果、キリシタン・かくれキリシタン関係の重要な資料の発見と研究も進んだが、同時に多くの「副産物」も生み出した (伊藤 2024: 55頁)。

(1) 「キリシタン灯籠」説の再興

戦争により一時的に下火になっていたキリシタン墓碑やキリシタン灯籠の「発見」は、戦後再び盛んとなった。戦後、「キリシタン灯籠」説を唱えた代表

的な人物が西村貞、竹村覚、松田重雄である。1948（昭和23）年に西村貞が「切支丹灯籠について―別名『耶蘇灯籠』の研究」（『キリシタンと茶道』に所収）を発表すると、「キリシタン灯籠」説への関心が再び高まった。多くの学術研究者がその編集に関わり、長きにわたってキリシタンに関する基礎文献とされた『切支丹風土記』（1960）においても、「キリシタン灯籠」説が紹介された。日本全国のキリシタン遺物を紹介した『キリシタンの美術』（1961）においても、「キリシタン灯籠」が西村らの解説とともに取り上げられた。

竹村覚は、久留米大学の教授を務めていた人物である。専門は英文学だが、キリシタン遺物の研究もおこなっていた。1964（昭和39）年に『キリシタン遺物の研究』を出版し、そのなかで「キリシタン灯籠」を紹介した。竹村はすべての織部灯籠が「キリシタン灯籠」ではないだろうとしながらも、「しかし、いわゆる織部灯籠の中に、キリシタン信仰と何等かの関係のある灯籠が存していることは事実である」（竹村 1964：10頁）と述べた。

松田重雄は鳥取県の郷土史家で、全国中学校校長会会長、鳥取民俗美術館長などを歴任した人物である。また、鳥取キリシタン研究会、全国かくれキリシタン研究会⁴を設立し、その会長を務めた。『潜キリシタンの信仰と切支丹灯籠』（1966）、『切支丹灯籠の謎』（1976）、『切支丹燈籠の信仰』（1988）などを出版し、「キリシタン灯籠」説を主張しつづけた。以上のような「キリシタン灯籠」説を支持した書籍は、学術研究者やキリスト教関係者も監修や編集などに関わっていたため、「キリシタン灯籠」説が学術的に裏付けられたかのような扱いを受けた。

戦後、「キリシタン灯籠」をはじめとしたキリシタン遺物をめぐる問題に対峙したのが松田毅一である。『切支丹風土記』や、単著『キリシタン：史実と美術』（1969）などにおいて、「キリシタン灯籠」説を明確に否定した。特に『キリシタン：史実と美術』「織部型燈籠の実体」においては、西村貞・松田重雄らに代表される「キリシタン灯籠」説の問題点を指摘し、織部灯籠の意匠を再検討した。さらには、千

提寺・下音羽地区のかくれキリシタン遺物発見を契機としておこったキリシタンブームが「郷土史家を刺激」し、「切支丹屋」が出現したこと、カトリック教会関係者がそれを「歓迎こそすれ、決して冷静、かつ批判的に対処」しなかったことが、「キリシタン灯籠」説の定着につながったと痛烈に批判した（松田 1969：177～178頁）。つまりは本書によって、「キリシタン灯籠」説は改めて完全に・明晰に否定されたのである。

しかし、昭和時代中頃には全国各地で「キリシタン灯籠」が市町村の文化財に指定されはじめた。指定は昭和40年～50年代（1965～1984）にかけて最も多く、松田毅一による「キリシタン灯籠」説の否定が全く取り合われていない状況がうかがわれる。そして「キリシタン灯籠」がある地域には、かつてかくれキリシタンが存在したとされ、現代のキリスト教徒からは「聖地」とみなされることもあった。

平成時代に入っても指定を受けた例が数件あり、新しい例としては福岡県朝倉市の「秋月のキリシタン灯籠」（朝倉市指定文化財、平成21年2月23日指定）がある。そしてその多くが、現在も現地の案内板や自治体のホームページで「キリシタン遺物」として公開されている。近年も「キリシタン灯籠」を題材としたインターネットコラム⁵で、「命を懸けて、工夫して信仰を続ける意志がすごい」と紹介されており、誤った解釈が広まり続けている状態である。

（2）博物館等への収蔵・展示

1950年代以降、博物館法の制定により全国で博物館・美術館・資料館等の設置が盛んになった。そのなかには、キリシタンに関する資料として虚構系資料を収蔵・展示した施設もある。地元の郷土史家や蒐集家が蒐集した「キリシタン遺物」がコレクションの大部分を占める施設もある。現在も一部では真正のキリシタン資料として展示されているが、多くの施設では偽資料と判断され、展示をおこなわずに収蔵庫保管されている。

西南学院大学博物館の開館は2006年で、開館以前に大学に寄贈されたキリスト教関連の学術資料が移管された。また開館以来、教会関係者などから「キ

リシタン遺物」とされるものの寄贈を受けた。虚構系資料と判断されたものは、展示をおこなわずに収蔵庫での保管をおこなっていた。ただ、「マリア観音」とされた白磁観音像（N-a-001）や、「魔鏡」（N-a-002）などは、十分な調査を踏まえずに「キリシタン遺物」であることを示唆するような展示がおこなわれていた。

2021年9月以降、当時の学芸員・下園知弥により、キャプションの変更や展示の撤去などがおこなわれた。2024年12月現在、白磁観音像と魔鏡はキリシタン遺物ではないことを明記したうえで常設展示している。

（3）キリシタン考古学研究の発展

前述のとおり、戦後のキリシタン研究をめぐっては、キリシタンの信仰とは関係のない石造物（灯籠、墓碑など）がキリシタン遺物と判断されており、問題となっていた。一方で、2000年前後からサント・ドミンゴ教会跡（長崎県長崎市）、原城跡（長崎県南島原市）、高槻城キリシタン墓地（大阪府高槻市）、大友府内町跡（大分県大分市）、東京駅八重洲北口遺跡（東京都千代田区）など、考古学的発掘調査によるキリシタン関連の遺跡・遺物の発見が相次いだ。そこで、キリシタン遺物の考古学的検証においては、判断基準を公正化するため、今野春樹（2006、2013）によって以下の四つの観点が示された。

キリスト教学的観点 キリスト教の歴史を含めてキリスト教の教義、信仰の形態に沿ったものであるかを検証する。

歴史学的観点 歴史中においてキリスト教の存在や活動の実態があるか否かを検証する。

美術史的観点 絵画や彫像などの作品において、先例としてキリスト教の事柄がモチーフとして使用されているか、また日本の伝統文化的系統に属さないものであるかを検証する。

考古学的観点 遺物がキリスト教文化の系統に連なるものであるかを考え、かつ形式分類や編年などの作業を通じて論理的に検証する。

以上四つの観点で検証し、積極的に認知できるものをキリシタン遺物として定義する。

（今野 2013：9頁）

以上は、とあるモノが「キリシタン遺物」であるかどうか、客観的に判断するための適切な観点である。

「キリシタン灯籠」とおなじく、キリシタンブームのなかで注目され、その結果真偽の定かではないものが多数「発見」されていたのが「キリシタン墓碑」である。2012年、大石一久によって全国のキリシタン墓碑が『日本キリシタン墓碑総覧』にまとめられた。本書においても、今野が示した四つの観点をもとにして、調査対象とした墓碑が決定された（大石 2012：10～11頁）。また、それまでのキリシタン墓碑研究のなかで生じていた分類の複雑さや語句の不統一などについても、再分類・統一が試みられた（大石 2012：11～12頁）。本書において調査の対象外となった「キリシタン墓碑」とされる墓標については、キリシタン考古学研究と近世墓標研究の観点から改めて「キリシタン墓碑」であるかどうかの再検証が必要である。

（4）現代における虚構系資料

2016（平成28）年に遠藤周作『沈黙』（1966年）を原作とした「沈黙 サイレンス」が公開されるほか、2018（平成30）年には、「潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産に登録されるなど、近年はキリシタン・かくれキリシタンの歴史と遺物への注目が増した。一部の施設では現在でも、虚構系資料が真正のキリシタン遺物として展示されており、誤った歴史や解釈を生み出すものとなっている。

虚構系資料のなかでも特に注目されているのは「踏絵」と「マリア観音」とされる観音像ではないだろうか。「踏絵」は、悲劇的なキリシタンの物語とともに禁教制度を代表する遺物と捉えられている。おもに遠藤周作『沈黙』に代表される創作物の影響で、キリシタンは「苦しみながら絵踏みをおこなっていた」というイメージが定着している。さらには、踏絵自体に教徒たちの苦しみや怨念などが籠っている

といった見方までされる。

「マリア観音像」についてはそのイメージだけがひとり歩きしている状況である。「かくれキリシタンが使用していた」という伝承のみを根拠として、かくれキリシタンの信仰とは全く関係のない立体像が「マリア観音」像として博物館等で展示される事例がある。

2020年12月には、日本各地の潜伏キリシタンに関する史資料が集成された『潜伏キリシタン図譜』が刊行された。本書においても、虚構系資料の掲載があることが指摘されている。特に、かくれキリシタンの信仰の存在が認められていない地域で、観音像が「マリア観音」とされる例が数件みられた（中園2021）。直近では、キリシタンの「聖地」とされる場所に、かくれキリシタンの信仰と全く関係のない現代の観音像を新たに設置し、「マリア観音」として公開している例もあり、本質とは離れたイメージ化が進んでいる。

3. 虚構系資料の分類

中園成生によれば、キリシタン関係虚構系資料は、成立の背景によって（1）キリシタン信仰、（2）かくれキリシタン信仰、（3）禁教制度に関連付けられたものに分類することができる（中園2024）。他にも、出自や経済的側面からの分類が可能とされるが、本項では成立の背景から西南学院大学博物館収蔵資料の分類をおこなった（表1）。以下、各資料について解説をおこなう。

1) キリシタンの信仰に関連付けられたもの

（1）南蛮人文小切（資料番号：N-a-023、図3）

「切支丹小切」と書かれた封筒が付属する。帽子とボタンのついた洋服を着用した人物の文様が施されている。この人物は南蛮人をモデルとしたものと考えられる。16世紀後半に南蛮貿易によってもたらされた輸入品を俗に「南蛮物」という。南蛮物は大正時代の茨木キリシタン遺物の発見を契機としたキリシタン（南蛮）ブームで、蒐集家を中心に注目さ

れた。また、キリスト教の遺物は南蛮物と同じ時代に輸入されていたため、両者は混同されることがある。

本資料も、南蛮風の意匠があしらわれていることから、キリシタンの信仰に関係があるとされたのだろう。資料の状態の良さや、類例する作品が確認できないことから、16世紀後半の「南蛮物」ではなく、販売目的で現代に制作された「南蛮物」であると考えられる。

（2）中川車紋軒丸瓦（資料番号：N-a-025、図4）

中川家の家紋を施した軒丸瓦である。中川家は、豊後国（現在の大分県の一部）にあった岡藩の藩主を代々務めた。中川家の家紋は、十字架を思わせるような形から別名「中川久留子（中川クルス）」紋とされ、たびたびキリシタンの信仰と関連付けられてきた。初代藩主・中川秀成がキリシタンに改宗したという史料は確認されていないが、沼田頼輔『日本紋章学』（1928）では、中川清秀が熱心なキリシタンで、その子の秀政（秀成の兄）もキリシタンであった⁶とされた。また、西村貞『キリシタンと茶道』（1948）においても、秀成がキリシタンであると推測された（松田 1969：113～128頁）。他にも、この家紋にはイエズス会の紋章「IHS」が隠されているとする説もある。

しかし、中川秀成と代々の藩主がキリシタンであったとする史料や遺物は発見されていない。また、十字文様はキリスト教伝来以前の日本でもよく使用されていた伝統的な文様である。十字文様をキリシタンの信仰と結び付けるためには、日本国内においてキリシタン「しか」十字文様を使わなかったという証明が必要である。

（3）鐐（N-a-028、図5）

刀鐐のなかには、キリシタンまたはかくれキリシタンが使用していた「キリシタン鐐」とされるものがある。「キリシタン鐐」とされるものには、十字形のもの、十字文様が施されたもの、磔刑などのキリスト教に関連する意匠が施されたものがある。本資料には「花十字文」のようにみえる十字形の透彫があるため、「キリシタン鐐」として当館に収蔵された。

表1 西南学院大学博物館収蔵の虚構系資料

図版番号	資料名	資料番号	制作年／素材・形態	来歴	大きさ (cm)
1) キリシタンの信仰に関連付けられたもの					
3	南蛮人小切	N-a-023	20世紀頃／絹製・金糸	古書店より購入	1. 縦11.0、横28.5 2. 縦10.0、横26.0
4	中川車紋軒丸瓦	N-a-025	17世紀／土製	個人（大学関係者）より寄贈	縦8.5、横6.5
5	鐙	N-a-028	不詳（20世紀か）／鉄製	個人より寄贈	径7.8
6	鐙	N-a-029	不詳（江戸時代か）／鉄製	個人より寄贈	縦6.9、横7.5
2) かくれキリシタンの信仰に関連付けられたもの					
8	白磁観音像	N-a-001	17世紀／磁器	個人（教会関係者）より大学に寄贈、2006年に大学博物館へ移管	高24.0、幅10.5、奥行6.2
9	白磁観音像	N-a-030	17世紀／磁器	不明	高さ17.8、最大幅9.3
10	白磁観音像	N-a-031	17世紀／磁器	不明	高さ22.5、最大幅9.3
11	観音像	N-a-032	不詳／銅製	不明	高さ9.5、最大幅5.3
12	観音像	N-a-033	不詳／木彫	不明	高さ23.7、最大幅10.9
13	魔鏡	N-a-002	20世紀／銅製	個人（教会関係者）より大学に寄贈、2006年に大学博物館へ移管	径21.0
14	染付「まるや」徳利	N-a-012	18世紀頃／染付、徳利	個人（教会関係者）より寄贈	口径3.4、高さ25.4、底径8.0
16	仏像付き十字架	N-a-026	1945（昭和20）～1950（昭和25）年頃／鉄製	個人（大学関係者）より寄贈	縦25.3、横19.5
17	染付十字文壺	N-a-034	20世紀頃／染付、壺	不明	口径9.5、高さ17.8、底径8.1
18	染付草花文皿	N-a-054	17世紀頃／染付、皿	個人（教会関係者）より寄贈	幅20.0、高さ3.0、底径12.9
19	染付十字文鉢	N-a-055	20世紀頃／染付、鉢	個人（教会関係者）より寄贈	幅17.5、高さ5.8、底径11.0
20	大黒天像	N-a-056	20世紀頃／木彫	個人（教会関係者）より寄贈	本体：高さ8.5、最大幅5.0 台座：高さ2.5、幅7.0
3) 禁教制度に関連付けられたもの					
21	踏絵（偽造品）	N-a-010	20世紀／青銅か	2010年の大学6号館解体に伴い、大学博物館へ移管	縦16.5、横11.3
22	板踏絵（偽造品）	N-a-011	20世紀／木、真鍮	個人（教会関係者）より寄贈	縦27.3、横19.5、厚さ3.2
23	紙踏絵（「宗門御改影踏帳（天明四年）」に綴じ込み）	N-b-001-1	20世紀／紙本木版	古書店より購入	縦30.4、横28.1
24	紙踏絵（「宗門御改影踏帳（文化三年）」に綴じ込み）	N-b-001-2	20世紀／紙本木版	古書店より購入	縦31.0、横22.0
24	紙踏絵（「宗門御改影踏帳（文化三年）」に綴じ込み）	N-b-001-2	20世紀／紙本木版	古書店より購入	縦31.0、横22.0
25	紙踏絵	N-b-004	20世紀／紙本木版、墨書	個人より寄贈（東京富岡八幡宮の骨董市で購入されたもの）	縦35.0、横23.0
26	紙踏絵	N-b-005	20世紀／紙本木版、墨書	個人より寄贈（太宰府市の骨董市で購入されたもの）	縦35.0、横25.0



図3 南蛮人文小切



図4 中川車紋軒丸瓦

鐔に武士の信仰の証となる意匠が伴うことは珍しくなかったが、明治時代に土産物用として偽造されたキリシタン遺物も多く、本物と偽造品の判別は専門家でさえ困難である（フーベルト・チースリク 1995：321頁）。本資料の茎櫃（刀身を通した孔）の棟側には、刀身を鐔に固定調整するために補った銅の貴金が残っている（相江 2022）。貴金の縁は、おそらく刀身の重量によって少し摩滅変形しているほか、茎櫃表面の刃先側にはいくつかの小さな剥落痕が観察できる（前掲同）。これらは実際に刀を装着して使用された痕跡とも考えられる（前掲同）。しかし、本資料をキリシタンが使用していたことを示す史料は確認されていない。

（4）鐔（N-a-029、図6）

本資料のような十字形の鐔も、「キリシタン鐔」とされることがあるが、これは近世の鐔として極めて



図5 鐔



図6 鐔

一般的な形である。すなわち、同様の鐔を所有していたからといって、その所有者がキリシタンであったとは言えない。本資料には、キリシタンが使用していたことを示す史料がないため、キリシタン遺物とはみなせない。

2) かくれキリシタンの信仰に関連付けられたもの

（1）白磁観音像（資料番号：N-a-001・N-a-030・N-a-031、図8、9、10）

1856（安政3）年におこった、かくれキリシタンの大量摘発事件「浦上三番崩れ」では、逮捕した信者から多数の立体像が没収された。そのなかには中国福建省・徳化窯で製造されたと考えられる白磁観音像があった。白磁観音像は、長崎・浦上、外海、五島列島などで「ハントマルヤ」と呼ばれ信仰の対象となっていた。長崎奉行所没収品が東京国立博物館に移管された後は、「マリア観音」像と呼ばれるようになった。東京国立博物館キリシタン関係遺品のなかで「マリア観音」とされる徳化窯製白磁観音像の型式は、大きく立像と坐像に分けることができる。なかでも、懷に幼児を抱いて岩上に座り、両脇に童子が合掌しているタイプの坐像（図7）が最も多く、「マリア観音」像の代表的な型式として理解されている。

崩れでは、徳化窯製白磁観音像以外にも銅製・木製・青磁製・石製の観音菩薩像や大日如来像、毘沙門天像などが「信仰対象」として没収された。また1805（文化2）年の天草崩れにおいても、天草地方のかくれキリシタンから大黒天・弁財天・弘法大師などの立体像が没収されたという記録が残っている。これらを根拠として、来歴不明の白磁観音像や立体像がかくれキリシタンが信仰対象としていた立体像として売買されるようになった。また、それらが博物館・資料館などで展示される例もある。

徳化窯製白磁観音像が、いつ国内に輸入され、どのようにして外海・浦上のかくれキリシタン達に受け入れられたのかは判明していない。しかし近年の研究では、18世紀初頭のイギリス東インド会社によ



図7 マリア観音像（東京国立博物館キリシタン関係遺品、期間管理番号：C-605）

出典：国立博物館所蔵品統合検索システム

(https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/C-605)

るヨーロッパ向けの徳化窯製白磁（Blanc de Chine）の販売記録に「Sancta Maria」という記載があることが判明した。すなわち、白磁観音像は徳化窯で聖母マリア像としてつくられ、それが観音像として長崎に輸入され、外海・浦上のかくれキリシタン達には再び聖母マリア像として信仰されるようになった可能性が浮かび上がった（宮川 2020：38頁）。

N-a-001・N-a-030・N-a-031はいずれも伝「マリア観音」像として当館に収蔵されていた白磁観音像であるが、来歴については不明である。N-a-001（図8）は、東京国立博物館キリシタン関係遺品に最も多く見られるタイプと同型の白磁観音坐像である。長崎・浦上で起こった崩れで没収を逃れたものとして、長崎バプテスト教会関係者から大学に寄贈があったものである。2006年の大学博物館開館時に、キリスト教資料展示室（現在は閉室）から移管された。本資料は来歴が不明なまま、2021年頃まで「マリア観音像」としてかくれキリシタンとの関連があるように展示されていた。

N-a-030（図9）も、東京国立博物館キリシタン関係遺品に最も多く見られるタイプと同型の白磁観音坐像にみえる。両脇の童子が向き合っているが、このタイプは東京国立博物館キリシタン関係遺品のなかには確認できない。N-a-031（図10）は、立体



図8 白磁観音像



図9 白磁観音像



図10 白磁観音像

像の約2分の1が蓮華座である点で特徴的である。東京国立博物館キリシタン関係遺品には同様の例がみられない。いずれの観音像も、詳しい来歴の調査がおこなわれるまでは、かくれキリシタンの遺物であるという断定はできない。

(2) 観音像 (資料番号：N-a-032・N-a-033、図11・12)

N-a-032 (図11) は金属で鑄造された観音像である。伝「マリア観音」像として当館に収蔵されていた。光背 (舟形光) の背面に十字が刻まれている。東京国立博物館が所蔵する長崎奉行所旧藏品には、同型の観音像は確認できない。N-a-033 (図12) は木製の観音像である。光背 (舟形光) の上部に十字形の彫り込みがある。こちらも伝「マリア観音」像として当館に収蔵されていた。いずれも来歴は不明で、どのような経緯で「マリア観音」像として伝わったのかが分かっていない。

(3) 魔鏡 (資料番号：N-a-002、図13)

魔鏡とは、光を反射させると鏡背の図柄とは異なる図柄が写し出される鏡である。国内に現存する魔鏡は、そのほとんどがいつ・どこで・誰によって制作されたのかが判明しておらず、さらにその使用状況についても明らかになっていない。ほとんどの魔鏡は二重構造であり、反射で投影したい図柄を鏡背に鑄造した鏡の上に、別の図柄が鑄造された金属板を重ねることで、鏡背 (とする金属板) とは違った図柄が写し出される仕組みになっている。そして現存する魔鏡が写し出す図柄はそのほとんどが仏教に関連するものである。

本資料も、鏡背の縁部分に金属を貼りあわせた痕跡が確認され、二重構造の魔鏡であることがわかる。光を反射させると磔にされたキリストとそれを拝む天使? が写し出されるため、かくれキリシタンが使用していた信仰具とみなされた。本資料と同様の鏡は国内に4面確認されている。検討の結果、おそらく京都で明治時代以降に製作されたものであり、かくれキリシタンの信仰とは関係がない (鬼束 2024 : 62頁)。

2006年の開館当初、かくれキリシタンの遺物である「キリシタン魔鏡」が展示されるとして、新聞などで大々的に報道された。その後2021年頃まではか



図11 観音像



図12 観音像 (下：光背の十字形の彫り込み)

くれキリシタン関係資料のように展示を続けていたため、現在でも「キリシタン魔鏡」が当館の代表的なキリシタン資料として認識されている。



図13 魔鏡（下：投影される図柄）

（4）染付「まるや」徳利（資料番号：N-a-012、図14）

本資料は当初、「キリシタン壺」として寄贈を受けた。江戸時代後期に肥前で生産された酒徳利と考えられる。酒徳利はその内容量から大中小に分類されるが、本資料は中にあたるか。胴部に描かれた帆船の帆には、丸の中に「や」と書かれる。この図柄を「まるや」すなわち、かくれキリシタンの信仰対象であった「ハンタマルヤ」を指す言葉と解釈することもできる。そのため、キリシタン遺物として認識された可能性がある。

なお、この図柄は江戸時代中期の民謡集『山家鳥虫歌』に収められている、肥前の歌「平戸小せどから舟が三ぞう見ゆる丸に屋の字のほが見ゆる」（図15）から着想を得たものと考えられる。



図14 染付「まるや」徳利

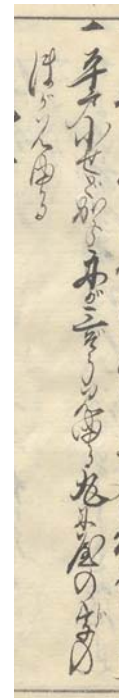


図15 『山家鳥虫歌』（部分、京都大学附属図書館蔵、請求番号：4-29/サ/4）

（5）仏像付き十字架（資料番号：N-a-026、図16）

中央に合掌をした仏像が施された十字架である。数ある虚構系資料のなかでも、制作者・制作地が明らかとなっている珍しい例である。この十字架については、1977年の名古屋切支丹研究会においてキリシタン遺物ではないことが注意喚起された（青山1977）。青山によれば、この十字架は愛知県海部郡美和町の個人によって、1945～1950（昭和20～25）年頃に約300個鑄造されたという。その後、チース

リクによっても『キリシタン史考』第5章「キリシタン遺物のニセモノ」で、「十字架の阿弥陀像」として取り上げられ、偽造品であることが再び説明された（フーベルト・チースリク 2000：316～318頁）。

魚津歴史民俗博物館では、麻柄一志によって仏像付きの十字架がかくれキリシタンとの関連性がないことが再検証され、「展示室から撤去」したとする（麻柄 2003）。当館でも収蔵当初から偽資料として認識されており、展示をおこなわないようにしていた。

ちなみに、このような仏像と十字架、仏具とキリストなどを組み合わせた虚構系資料には様々な種類のものが存在する。これらは、宣教師がいなかった禁教期にキリスト教徒が信仰の形態を変化させていったという「禁教期変容論」を根拠として成立したと考えられる。すなわち、「一部の地域では、キリスト教徒であることの発覚を免れるために、仏像の背や底面、厨子の中に十字架を隠して」信仰が続けられたという具合である。しかし、実際のかくれキリシタン信仰のなかでは、仏教や神道とキリスト教が併存して信仰されることはあっても、それらの意匠を混合して信仰具とした例は確認できていない。

（6）染付十字文壺（資料番号：N-a-034、図17）

全面頸部に十字文様、胴部に「寿」、背面に草花文が施された壺である。色調から酸化コバルトを使用しているように見えるため、明治時代以降に生産

されたものであろう。十字文様の意匠が十字架として解釈されたというよりは、はじめからかくれキリシタンの信仰具として販売するために十字架を施した商品であると考えられる。

本資料のような十字架をモチーフとした陶磁器は、大正時代～昭和時代のキリシタン（南蛮）ブームで盛んに作られたものと考えられる。キリシタンと茶の湯の関係については、織部灯籠「キリシタン灯籠」説とともに有力に支持されており、十字文様が施された茶碗類が一部の蒐集家の間で熱心に蒐集されていた⁷。

わび茶を大成させた千利休は、南蛮貿易の拠点であった泉州堺に生まれ、キリスト教の教義や宣教師たちがおこなっていた儀式に触れる機会が多かったと考えられている（古田織部美術館編 2018：1頁）。また、利休の周りにはキリスト教に入信していた大名や門下の存在もあった（前掲同：1～2頁）。利休自身や利休の家族がキリスト教に入信していたという説もあるが、根拠となる史料は一切残されていない（前掲同：3頁）。

（7）染付草花文皿（資料番号：N-a-054、図18）

17世紀ごろ、肥前で生産されたと考えられる。回転させると図柄の一部分が十字架に見えることから、「かくれキリシタン」が祈る際に使用していたことが想定されていた。皿ではないが、福岡県立美術館久我コレクションのなかに同様の意匠が施さ



図16 仏像付き十字架



図17 染付十字文壺

れた鉢が確認できる(楠井編 1996:11頁)。福岡県内の牧師がコレクションしていたものの一部で、十字文鉢(図19)・大黒天像(図20)と一緒に寄贈された。

(8) 染付十字文鉢(資料番号:N-a-055、図19)

見込みに十字文様が施された鉢。酸化コバルトを使用し、型紙摺りの技法が使用されているため、明治時代以降に生産されたものであろう。聖水を入れる容器としての使用が想定されていたと考えられる。

(9) 大黒天像(資料番号:N-a-056、図20)

正面から見ると一般的な大黒天像である。本体部分と台座部分(米俵)に分かれており、本体部分の

底面に十字が刻まれている。大黒天像は、熊本県天草市の崎津集落周辺で唯一神デウスに見立てて崇拜されていたとされる。1805(文化2)年に起こった「天草崩れ」では、131件の信仰「異物(異仏)」が代官所に差し出されたという記録があり、その中に大黒天像も含まれていた。それ以外にも、鏡、銭、弁財天像・弘法大師像・地藏などの立体像、アワビの殻、タイラギ貝の殻などが差し出された(平田2021:234~238頁)。しかし、立体像の底面や背面に十字文様が彫り込まれていた例は確認されていない。かくれキリシタン達が実際に仏像と基督教の意匠を混せて信仰具としていた事実が確認できるまでは、「かくれキリシタン遺物」と断定することはできない。



図18 染付草花文皿



図20 大黒天像(右:本体部分底面)



図19 染付十字文鉢

3) 禁教制度に関連付けられたもの

(1) 踏絵(偽造品、資料番号:N-a-010、図21)・

板踏絵(偽造品、資料番号:N-a-011、図22)

踏絵は小・中学校の歴史の授業でも学習するため、国内では一番有名なキリシタン関係資料ともいえるだろう。江戸時代、キリスト教徒を取り締まるために一部地域で使用されていたもので、板にキリストや聖母マリアのメダイやプラーク(plaque)が嵌め込まれたものと、真鍮製でキリストや聖母マリアの図柄が鋳造されたものが現存し、東京国立博物館に収蔵されている。現存する踏絵はすべて長崎奉行所の旧蔵品である。各藩が絵踏をおこなう際には



図21 踏絵（偽造品）



図22 板踏絵（偽造品）

長崎奉行所から貸し出しをする形をとっていた。これに加え、独自に踏絵を所持していた熊本藩・小倉藩や、かつて踏絵をしていた岡山藩と会津藩の踏絵が発見される可能性が残されているが、現在のところ確認されていない（安高 2022：306頁）。

踏絵として制作されたキリストや聖母マリアの図像は、新たな信仰具となりうる恐れがあると考えられていたようである。元々藩内で絵踏をおこなっていた平戸藩では、踏絵を処分する際、平戸・長崎双方の宗門改め役立会いのもとで焼き捨て、その灰までも集めて処理するなど徹底的な管理をおこなっていた（安高・内島 2016：25頁）。これらのことから、真正の踏絵は現在東京国立博物館が所蔵する板

踏絵と真鍮踏絵のみであり、それ以外のものは偽造品といえる。

安高啓明『踏絵を踏んだキリシタン』（2018）では、絵踏が全国的にはなく限られた一部の地域でしかおこなわれていなかったことが改めて解説され、絵踏の形骸化などについてもまとめられた。本書では、キリシタン達が「苦しみながら」踏絵を踏んでいたというイメージと真逆の説が論じられた。一方で、絵踏が一部地域のみでおこなわれていたのではなく、全国的におこなわれていたというイメージが根強い。そのため、地域の資料館などで偽造品の踏絵が「江戸時代にこの地域で実際に使用されていた」という解説を伴って展示されていても、違和感を抱かない人もいる。

（2）紙踏絵（資料番号：N-b-001-1・N-b-001-2・N-b-004・N-b-005、図23～26）

紙踏絵は同じ版元で制作されたと考えられる版が多数確認されており、高倉洋彰によって集成と分類がおこなわれた（高倉 2014：279～312頁）。そこで、紙踏絵はキリシタン資料ではないと結論が出されているが、未だに真正の踏絵として認定されたり販売されたりしているものが確認される。

いずれの資料も、十字架と人物の頭部像・アルファベット筆記体「Christ」・禁制句「一切支丹伴天連ヲ踏マザル者獄門ノ事」が木版で印刷される点で一致している。これは現在確認されているほとんどの紙踏絵に共通する基本要素である（高倉 2014：283頁）。また、類例資料のなかには「マリア観音像版」とされる、「マリア観音像」とアルファベット筆記体「Christ」などが刷られたものも存在する（前掲同：305頁）。

まず、中央の図像に注目する。十字架の縦木先端部分に、男性の首が載せられた（突き刺さった？）図像である。キリスト教の十字架表現のなかに、このようなものは存在しない。この時点で、踏絵としての役割を果たせないことがわかる。たとえ実際のキリスト教の図像が失われていた時代であっても、取り締まろうとする側がここまで杜撰であったとは考えにくい。絵踏が形骸化していた時代であって



図23 紙踏絵



図25 紙踏絵

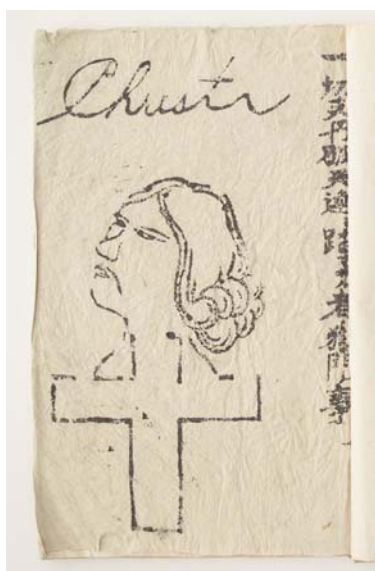


図24 紙踏絵（表、裏）



図26 紙踏絵

も、「信仰具（が元になったもの）を踏ませる」という形式は守る必要があったはずであるから、この図像が取り締まりに使用されていた可能性は極めて低い。

男性の首の上には、アルファベット筆記体で「Christr」と記される。英語もしくはフランス語の「キリスト」表記「Christ」の誤表記と考えられる。江戸時代、アルファベットの筆記体は長崎・出島を通じてもたらされた洋書に記されている程度で、一部知識層の間でのみ認識されていた。仮にかくれキリシタンがこの筆記体を見たとしても「キリスト」であると理解できる可能性は低い。そのため、キリシタンを取り締まるという目的の上では、この「Christr」が意味をなさないものであることがわかる。

N-b-001-1とN-b-001-2（図23・24）は、島原藩が作成した「宗門御改影踏帳」の、天明四（1784）年本と文化三（1806）年本に綴じ込まれていたものである。N-b-001-1（図23）は、天明四（1784）年本に綴じ込まれているもので、男性の頭髪が朱で刷られている。料紙の色調などから、宗門改帳の本紙とは別の料紙が使用されている可能性がある。印影が掠れていてほぼ見えないが、右上端に黒田家の家紋である藤巴紋、禁制句の下に七宝木瓜紋がそれぞれ朱で捺されている。左下に墨書の痕跡があり、左側に紙幅が広がっていた可能性がある。N-b-001-2（図24）は、文化三（1806）年本に綴じ込まれているもので、同じ紙に2枚分の紙踏絵が刷られている。これらの紙踏絵が宗門改帳に綴じ込まれたのは、封緘印のズレなどから後世のものであると判断されており、島原藩での使用や使用時期を示すものではないとされる（高倉 2014：283頁）。

N-b-004（図25）とN-b-005（図26）にはいずれも黒田家の家紋である藤巴紋が朱印で捺されている。この踏絵が実際に使用されていたならば、これを踏んだ者は黒田家の家紋も一緒に踏むことになった。N-b-004（図25）には、禁制句の上に横書きで「黒田家之定」と刷られ、左端に「寛文元年」「其旨添候故急調近参地名右（以下不明）」と墨書される。

N-b-005（図26）は、十字架中央部分にイエズス会の紋章である「IHS」の朱印が捺されている。江戸時代まで、朱印は主に将軍・大名による公文書にしか用いられなかった。もしキリスト教を邪教としていたならば、IHSの紋章が黒田家の家紋と同格の朱印で捺されるとは考えにくい。そのため、本資料は少なくとも江戸時代に制作されたものではないことが明らかである。右下には「扇城吟社之章」「大日本筑前國上座郡志波村里城 □」の二種の所蔵者印が朱で捺されている。左上には七宝木瓜紋が朱で捺され、その下に「文政元年」と墨書される。

それぞれ、使い古されたような皺をつける、宗門改帳に綴じ込むなどして、いかにも踏絵として使用されていた状況を表そうとしている。しかし、図像に注目すれば上述のような矛盾点が多く見えてくる。さらには、福岡藩が踏絵をおこなっていたという正式な記録は確認されていない（中禮 2017）。以上のことから、紙踏絵は販売目的で制作された偽資料であることが理解できる⁸。

4. おわりに

2024年は、大阪府茨木市のキリシタン遺物史料館で「茨木のキリシタンイメージ 何を“キリシタン遺物”とするのか」（会期：2024年3月22日～5月13日）が開催され、虚構系資料が展示された。当館の企画展「創られたキリシタンイメージー排耶書・実録・虚構系資料ー」（会期：2024年8月23日～10月5日）でも、平戸市生月町・島の館の協力により、多数の虚構系資料を展示することができた。これらの展覧会によって、虚構系資料への関心が高まっている。

2024年は、踏絵に関心が集まった年でもあった。5月には、中学歴史の資料集『学び考える歴史』（浜島書店）で紹介された真鍮踏絵に、「踏めば助かるのに…。」というコメントを残すロボットが、「人の心がない」辛辣な発言としてX（旧 Twitter）で話題となり、その後ロボットとその発言がミーム（meme）化した。このコメントのそもそもの意図と

しては、キリシタン禁制に対する客観的な視点を入れることで、考察や議論を生ませる効果を狙っているものであろう。X上では、踏絵に関して「踏んだ後に足を清めていた」「キリスト教は偶像崇拜禁止だから本物の信仰心があれば余裕で踏める」「『沈黙』を読んで欲しい」などの、踏絵に対する様々な解釈を示すコメントがみられた。

10月25日～27日に開催された「神田古本まつり 特選古書即売展」で、「踏み絵」が販売されていたこともX（旧 Twitter）で話題となった。目録を確認してみると、確かに「踏み絵 十字架上のキリスト」が「寛文9年」製、「実際に使用された為摩耗有」として出品されていた。さらに、その前後に「踏み絵 ピエタ聖母像」「クロス 隠れキリシタン」（本稿で扱った「仏像付き十字架」〔図16〕）も販売されていた（2024年『特選古書即売展』目録）。これらの資料は、本稿で紹介したような虚構系資料である。しかし、出品されていたものを真正の踏絵として認識していた人は少なくなかった。さらには、踏絵に対して「キリシタンの怨念がこもっているのではないか」、人気漫画・アニメ作品『呪術廻戦』の用語にかけて「特級呪物⁹である」とポストする人もみられた。現代のキリシタン・かくれキリシタンイメージには、小説や映画などの創作物に登場する禁教期初期の「キリシタン」の姿の影響が大きいのだと再認識させられた。

歴史にはロマンがある。歴史が好きであれば、各々の立場から「こうだったらいい」「こうあって欲しい」という、過去に対する願望も少なからず存在するはずだろう。しかしながら、学術的な検証を踏まえずに、伝承や願望・イメージなどをまるで「史実」のように扱い、歴史を修正してしまうことに問題があるのは言うまでもない。また、かくれキリシタンが「記録を残せなかった」という理由のもとに、様々なものをかくれキリシタンに関連付けるという行為は、歴史学の手法からは外れるものである。そして、「人びとがそれぞれに過去を自分の立ち位置から切り出してくるなかで、切り取られてきたものの妥当性を相互チェックするというのが学問

本来のあり方」¹⁰であり、「忖度」や「配慮」のもと、歴史に関する誤った解釈を肯定も否定もしない状況は不健全である。

キリスト教関係虚構系資料は、それらを「キリシタン遺物として扱うこと」に問題がある。そして、単に「混乱や誤解を招いた悪いモノ」として扱うべきではない。近現代のキリシタン（南蛮）ブームやキリシタンイメージの歴史などに関連付けて、日本における「キリスト教の歴史」の一部に取り込み、「実際のキリシタン・かくれキリシタンの信仰とは関係が無い」ことを明示したうえで展示などに活用すべきである。今後、キリシタン関係虚構系資料が、キリシタン・かくれキリシタンイメージ研究や歴史捏造などの文脈で再解釈され、一種の歴史資料として活用されていくことを望みたい。

謝辞

本稿の執筆にあたって、指導教員である西南学院大学国際文化学部教授・伊藤慎二先生にご指導を賜ったほか、多くの方々にご協力をいただきました。

キリシタン関係虚構系資料については、平戸市生月町博物館・島の館館長・中園成生氏に、資料調査のご協力とご教授をいただきました。キリシタン研究史については同志社大学神学部准教授・三輪地塩氏に、キリシタン灯籠については東京大学大学院宗教学研究室博士後期課程・服部直美氏に、ご教授とご助言をいただきました。

以上の方々へ、ここに深謝の意を表します。

註

- ¹ 『史迹と美術』第89号、39～43頁、1938年。
- ² 新村出「摂津高槻在東氏所蔵の吉利支丹遺物」／新村出・濱田耕作「京都及其付近發見の切支丹墓碑」／濱田耕作・梅原末治「切支丹教名合字鞍及南蠻人繪鞍に就て」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第7冊、1923年。
- ³ 西南学院百年史編纂委員会編 2019『西南学院百年史《通史編》』、123頁、学校法人西南学院
- ⁴ 創立当初は「全国潜れキリシタン研究会」。
- ⁵ 井口エリ 2023「目黒に隠れキリシタンが信仰した灯籠を見に行く」（デイリーポータルZ、2023年2月7日公開版、

- <https://dailyportalz.jp/kiji/lanterns-worshipped-by-hidden-Christians-in-Meguro>, 2024年12月20日確認)
- ⁶ 沼田は、クラッセ『西教史』に基づいて清秀がキリシタンであったとするが、そのようなことは記されておらず、高山右近を誤って清秀と解釈したとされる(松田 1969: 122頁)。
- ⁷ 福岡県立美術館が所蔵する、画商・久我五千男が収集した「久我コレクション」には、久我がキリシタン信仰との関連を想定し収集した「キリシタン関係資料」309件がある。内訳は陶磁器・漆工品・金工品・木工品・彫刻・絵画・歴史資料からなる(楠井編 1996: 巻頭)。それらの中に、昭和時代中期以降に制作されたとされる、十字文などが施された茶碗・花器・水差し・香炉・香合などの陶磁器が約120点含まれ(楠井編 1996: 54~76頁)、久我が熱心に収集していた状況がうかがわれる。
- ⁸ 資料の科学分析を含む最新の研究では、紙踏絵の中には江戸時代後期に制作されたものがあり、踏絵として機能していたのではなく、禁教制度のプロパガンダのための道具として機能していたという説もある。ただ、現存する紙踏絵の多くは20世紀に制作されたものとされている(Montanari ほか 2025)。
- ⁹ 芥見下々『呪術廻戦』のなかで、特に呪力が強い呪物を指す用語。
- ¹⁰ 小野寺拓也・田野大輔 2023『検証 ナチスは「良いこと」もしたのか?』岩波ブックレット1080、5頁、岩波書店

参考文献

- 相江なぎさ 2022「所蔵品紹介 十字文鐔」『西南学院大学博物館ニュース』Vol.45、西南学院大学博物館
- 青山 玄 1977「キリシタン遺物ではない十字架」『名古屋キリシタン文化研究会会報』第1巻、120頁、名古屋キリシタン文化研究会
- 井藤暁子編 1999『彩都(国際文化公園都市)周辺地域の歴史・文化総合調査報告書』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第40集、(財)大阪府文化財調査研究センター
- 伊藤玄二郎編・五野井隆史監修 2021『潜伏キリシタン図譜』潜伏キリシタン図譜プロジェクト実行委員会、かまくら春秋社
- 伊藤慎二 2024「筑前山家の『キリシタン伝説』と吉原勝」『創られたキリシタン像：排耶書・実録・虚構系資料』西南学院大学博物館研究叢書、52~55頁、花乱社
- 茨木市立文化財資料館 2018『茨木のキリシタン：信仰を捧げた人びと』茨木市教育委員会
- 今野春樹 2006「キリシタン遺物の諸相：新発見の可能性に備えて」『キリシタン文化研究会会報』128号、22~45頁、キリシタン文化研究会
- 今野春樹 2013『キリシタン考古学』考古調査ハンドブック8、ニューサイエンス社
- 大石一久編 2012『日本キリシタン墓碑総覧』南島原市教育委員会
- 鬼束芽依 2024「西南学院大学博物館蔵『魔鏡』は『かくれキリシタン資料』といえるのか?」『創られたキリシタン像：排耶書・実録・虚構系資料』西南学院大学博物館研究叢書、60~63頁、花乱社
- 鬼束芽依編 2024『創られたキリシタン像：排耶書・実録・虚構系資料』西南学院大学博物館研究叢書、花乱社
- 楠井隆志編 1996『久我コレクション調査目録』第三集、キリシタン関連資料篇、福岡県立美術館

- 桑野 梓 2024「茨木のキリシタンイメージ 何を“キリシタン遺物”とするのか」茨木市立キリシタン遺物史料館第14回企画展パンフレット、茨木市教育委員会
- 竹村 覚 1964『キリシタン遺物の研究』開文社
- 中禮尚史 2017「所蔵品紹介 紙踏絵」『西南学院大学博物館ニュース』Vol.33、西南学院大学博物館
- 高倉洋彰 2014『行動する考古学』中国書店
- 東京国立博物館編 2001『東京国立博物館図版目録：キリシタン関係遺品篇』東京国立博物館
- 中園成生 2011a「鍋山石を用いた石造物：石龕を中心に」『萩市福栄地域における隠れキリシタン調査事業報告書』15~28頁、山口県萩市
- 中園成生 2011b「山口県下キリシタンの動向と紫福地区におけるかくれキリシタン信仰の可能性」『萩市福栄地域における隠れキリシタン調査事業報告書』29~40頁、山口県萩市
- 中園成生 2018『かくれキリシタンの起源：信仰と信者の実相』弦書房
- 中園成生 2019a「変容と併存」『生月学講座』No.176(長崎県平戸市生月町博物館島の館ホームページ、<https://shimanoyakata.hira-shin.jp/index.php/view/239>、2019年12月18日公開版、2024年12月12日確認)
- 中園成生 2019b「信仰『併存』理解」『生月学講座』No.177(長崎県平戸市生月町博物館島の館ホームページ、<https://shimanoyakata.hira-shin.jp/index.php/view/242>、2019年12月18日公開版、2024年12月12日確認)
- 中園成生 2019c「『虚構のかくれキリシタン』の問題」『生月学講座』No.179(長崎県平戸市生月町博物館島の館ホームページ、<https://shimanoyakata.hira-shin.jp/index.php/view/244>、2019年12月18日公開版、2024年12月12日確認)
- 中園成生 2021「『潜伏キリシタン図譜』の検証」『生月学講座』No.216(長崎県平戸市生月町博物館島の館ホームページ、<https://shimanoyakata.hira-shin.jp/index.php/view/327>、2021年6月8日公開版、2024年12月12日確認)
- 中園成生 2024「キリシタン関係虚構系資料の分類」『生月学講座』No.275(長崎県平戸市生月町博物館島の館ホームページ、<https://shimanoyakata.hira-shin.jp/index.php/view/442>、2024年12月2日公開版、2024年12月12日確認)
- 平田豊弘 2021「肥後・天草の潜伏キリシタン」『潜伏キリシタン図譜』、228~241頁、潜伏キリシタン図譜プロジェクト実行委員会、かまくら春秋社
- フーベルト・チースリク 1995『キリシタン史考：キリシタン史の問題に答える』聖母の騎士社
- 古田織部美術館編 2018『キリシタンと茶の湯』宮帯出版社
- 麻柄一志 2003「歴史のなかの嘘：隠れキリシタン十字架調査顛末記」『富山県博物館協会デジタル展覧会・電子紀要』(<http://museums.toyamaken.jp/documents/documents006/>、2024年12月10日確認)
- 松田毅一 1953『キリシタン研究』第一部、創元社
- 松田毅一 1969『キリシタン：史実と美術』淡文社
- 松本 真 2000「織部灯籠：『キリシタン灯籠』の遺品は存在しない」『広島修大論集』第40巻第2号、49~113頁
- 宮川由衣 2020「サンクタ・マリアとしての白磁製観音像：潜伏キリシタン伝来の『マリア観音』をめぐる」『西南学院大学博物館研究紀要』第8号、29~39頁、西南学院大学博物館
- 三輪地塩 2023「キリシタン研究の現在：キリシタン・イメージの形成とキリシタン・ブームに関する考察」『基督教研

- 究』第85巻第2号、19～33頁、同志社大学神学部内基督教研究会
- 三輪地塩 2024「キリシタン研究の発展とキリシタン資料・遺物の『発見』史」『創られたキリシタン像：排耶書・実録・虚構系資料』西南学院大学博物館研究叢書、48～51頁、花乱社
- 安高啓明・内島美奈子 2016「絵踏の展開と踏絵の図像：貸借にみる踏絵観」『西南学院大学博物館研究紀要』第4号、25～38頁、西南学院大学博物館

- 安高啓明 2018『踏絵を踏んだキリシタン』歴史文化ライブラリー469、吉川弘文館
- 安高啓明 2022『潜伏キリシタンを知る事典』 柊風舎
- Montanari, Riccardo, Philippe Colomban, Maria Francesca Alberghina, Salvatore Schiavone, and Claudia Pelosi. 2025. "Kami Fumi-e: Japanese Paper Images to Be Trampled On—A Mystery Resolved." *Heritage* 8 (78). <https://doi.org/10.3390/heritage8020078>. (2025年3月6日確認)

鬼束 芽依（おにつか めい）

西南学院大学博物館学芸研究員